

あたたかい手を忘れずに — シャープの原点 早川徳次 —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

台湾の鴻海グループに買収されたシャープの幹部が創業の精神を忘れて大企業病に陥っていたと反省の弁を述べていた。創業の精神とはシャープの生みの親である早川徳次(1893-1980)の経営のスピリットにほかならない。

不幸な生い立ちにもかかわらず早川は独創的な発明の才能を発揮して町工場からグローバル企業へ会社を飛躍させていった。シャープという社名は早川が開発して事業の礎を築いたシャープペンシルから命名された。

しかし浮き沈みも激しく、関東大震災では会社ばかりか家族も失って奈落の底に突き落とされた。それでも不死鳥のように甦ったのは己を奮い立たせる不屈の信念があったからだろう。

逆境に喘いでいる者にとって早川は闇夜の灯のような導きの糸になる。

運命を変えた丁稚奉公

早川は東京・日本橋の家具職人の家に3人兄弟の末っ子として生まれた。母親が病気がちで生後1年11カ月で養子に出された。

養母が2年後に急逝し、後妻から疎まれて不遇の幼少期を過ごす。家は貧しく尋常小学校を2年でやめさせられ、食事も満足に与えられず朝から晩までマッチ箱を貼る内職をやらされた。

不憫に思った近所の老女の世話で本所の金属細

工の店へ7歳で丁稚奉公に出る。主人の坂田芳松は職人氣質で仕事にはきびしかったものの、情に厚く親身になって面倒をみてくれた。早川は後年「こうした人に会ったことは実に幸せなこと

で、ここで私は技術屋としての腕を磨くと共に人の世の情けというものを授かった」と語っている。

夜の店番ではビール箱に腰を下ろして本を開き、漢字を一晚一字ずつ覚えていった。これが評判になって本を読む夜店小僧と呼ばれるようになる。

9年近くに及ぶ奉公を終えて一人前になった早川は大正元年(1912)、穴を開けずにベルトを使える徳尾錠と名づけたバックルで初の特許を取得。大量の注文が入り、18歳で独立した。翌年に蛇口の方向を変えることができる水道自在器を発明し、さらに売り上げを伸ばす。

大正4年(1915)、万年筆など金属文具の分野に進出し、のちにシャープペンシルと改名される早川式繰出鉛筆を考案する。当初はまったく売れなかったものの、欧米から火がついて注文が殺到



早川徳次

する。勢いに乗って次々と工場を増設し、30歳の若さで社員200人以上を抱える起業家に成長した。

どん底から大阪で再起

結婚して家庭生活にも恵まれた順風満帆の日々は大正12年(1923)9月1日、関東大震災の襲来で一気に暗転する。3つの工場は全壊し、火の手が迫った墨田区立川の自宅から清澄庭園へ妻子を避難させたところ猛火に巻き込まれて9歳と6歳の息子を失う。大火傷を負い、錯乱状態になった妻も2カ月後に亡くなった。

すべてを失った早川に追い討ちをかけるように大阪の特約販売店から契約金と融資金の即時返済を迫られた。先方とは焼け残った機械類の譲渡やシャープペンシル関連特許の無償提供などで合意し、みずからも技師長として働くことになった。

同年12月に大阪へ移り住み、東京からついできた部下14人と共に技術指導に専念する。翌年8月に6カ月の契約期間を満了し、退社後も大阪にとどまって再起を期す決意を固めた。

震災から1年後の9月1日、早川を慕う部下らと現在のシャープ本社がある大阪市阿倍野区長池町に早川金属工業研究所を設立。万年筆の付属金具などの製造・販売の傍ら新事業を模索し、翌年6月から開始するNHKのラジオ放送に眼をつけた。心齋橋の時計店でアメリカから初輸入された鉱石ラジオを入手し、ろくに電気の知識も持ちあわせなまま部品を正確に再現する研究に打ち込んだ。

試行錯誤を重ねて大正14年(1925)4月に国産第1号の鉱石ラジオの完成にこぎつける。庶民も買えるように輸入品の半額以下で売り出すと飛ぶように売れ、ブランド名のシャープは一躍全国に轟いた。

とはいえ辛酸を嘗めつくした早川は舞い上がることなく先を見据えて新製品の開発に着手する。「良いアイデアが生まれるのは儲からなくて何とかしようと苦しんでいるときである。だから私は儲かることをあまり喜んではない」というのが早川の本音であり、戒めであり、教訓だった。

地道な研究によって昭和4年(1929)、遠距離でも受信できる真空管ラジオを発売し、世界的な金融恐慌の嵐を乗り越えた。その逆に活路を見い

出せなかった多くのラジオメーカーが倒産した。昭和10年(1935)、業績拡大に伴い新たに株式会社として改組し、早川は社長に就任する。社員は564人に達し、震災から12年で驚異的な復活を遂げた。

事業の目標は社会への奉仕

第2次世界大戦後は物不足とアメリカのインフラ抑制策ドッジ・ラインによって不況が深刻化し、ふたたび経営難に直面する。銀行は融資の条件として社員の削減による経営の合理化を迫った。

これに対して早川は「人員の整理をやるくらいなら、むしろ会社が閉ざされる方を選ぶ。会社がつぶれても従業員諸君と一蓮托生ならば、もって瞑すべきではないか」と応じなかった。早川の覚悟を察した社員たちは率先して協力する姿勢に転じ、労働組合も自主的に希望退職者を募って融資が実現した。

倒産の危機を免れた早川は「新しいアイデアで他より一歩先に新分野を開拓していかなければ、とうてい成功は望めない」として総合家電メーカーへの道を志す。昭和27年(1953)、国産テレビ第1号の発売に続いてカラーテレビ、電子レンジ、オールトランジスタ式電卓などを次々と開発し、時代の最先端で新市場を切り拓いていった。

昭和45年(1970)1月1日、早川は社名をシャープに変更し、同年9月で会長に退く。経営には口を出さず、10年後に86歳で激動の生涯の幕を下ろした。

戦後の早川は事業活動とあわせて福祉活動に情熱を注いでいた。視覚障害者が独立採算制で経営する金属工場をはじめ共働きや身障者の子供を預かる育徳園保育所などを開設した。

事業の目標は社会への奉仕と感謝の実行にあると明言した早川の原点は悲惨な養子時代に遡る。幼い早川への仕打ちを見かねて奉公先を世話した井上せいはい眼が不自由だった。彼女に手をひかれて坂田芳松の店へ向かった日のことを早川は晩年回想している。

自分の生涯の門出は盲目の井上さんによって開かれた。そのときのあたたかい手のぬくもりが忘れられないと。